

## 序章 「日本／文化」の条件

### 「歴史的円安」下の2020年代

本書は、日本の芸術や文化、サブカルチャーの「海外進出」の可能性について、あれこれ考えてみよう、という内容です。

この本のもとになった連載を書いていた2024年5月末、1ドルは156円台で推移していました。「歴史的円安」「超円安」などと呼ばれる状況です。円安傾向は、2022年の春ごろから始まりました。2022年3月は1ドルの平均値が118円でしたが（それ以前は115円台までを推移）、4月に126円近くまで跳ね上がり、6月に130円を超えて以後、現在に至るまで一度も130円を割っていません。円安傾向は対ドルだけではなく、対ユーロも同様で、2024年2月に平均値が160円を突破しています。

円安が今後ますます進むのか、それともどこかのタイミングで歯止めがかかるのか、もちろん私は経済の素人なので何も予測はできませんが、いずれにせよ現在は、輸出業者にとっては非常に好ましく、輸入業者にとっては大変苦しい状況です。

為替レートは、めぐりめぐって私たちの日々の生活や人生設計にかかわってきます。本書で取り上げていくさまざまなカルチャーの分野でも、商品輸入という側面だけでなく、映像や音楽のソフト、印刷媒体などの製造費や流通コストにも影響してきますから、すでにどのジャンルでも市場規模が縮小しているというのに、文化的コンテンツのさらなる価格上昇と売れ行き不振を招くことになるのは避けられない気がしています。

一方、円安のプラス面と考えられるのが、インバウンド消費の拡大です。

日本では2020年に予定されていた東京オリンピック・パラリンピックに向けて訪日外国人の増加を見越した大規模な設備投資や（関東に限らない）観光施設の整備などが推し進められました。周知のようにコロナ禍によって2020年の開催は中止され、1年後の2021年の（かなり無理をした）開催となったわけですが、オリンピック・パラリンピック以降、特にコロナが落ちついてからは、海外からの観光客は激増しています。

全国各地の観光地はもちろん、東京なら新宿や渋谷といった盛り場（以前から海外客は多かつ

たですが最近はますます増えており、街を歩いていても日本語がほとんど聞こえてこないほどです）、インターネットで情報を得ることが容易になったせいなのか以前なら穴場とされていたようなマニアックな土地にも外国人観光客が押し寄せています。

インバウンドの盛り上がりが円安によって拍車をかけられていることは間違いありません。日本はデフレが長く続いてきたので特に外食産業の価格設定はもともと海外に比べてかなり安かったのですが、円安によって外貨を持っている訪日客にはさらにお得感が強まりました。その昔は日本人観光客が他国、たとえば東南アジア諸国を訪れて円高を武器に豪遊する、という蛮行が繰り返られていましたが、現在は完全に逆転しており、経済発展が著しいタイやフィリピン、ベトナムといった国々からの観光客が日本のモノの安さに驚嘆するといった現象も起きています。

インバウンドを狙った商売もいろいろと出てきていて、ひところは観光地で外国人向けに料金を高額に設定したものが「インバウンド井」と揶揄やゆされてネットをざわつかせたりしていました。インバウンドがもつともすごいのは、言うまでもなく京都です。もともと日本に初めて来た観光客で訪れない人はいないと言っているいいジャポニズムの象徴都市ですが、その人気はますます凄まじく、つい先日もある催しで京都から来た人が自己紹介のときに「オーバーツーリス

ムの街、京都からやってきました！」と苦笑まじりに言い放って場内のウケを取っていました。激増する外国人観光客の行為に伴うさまざまなトラブル<sup>11</sup>オーバーツーリズム<sup>12</sup>はにわかに社会問題化しつつあります。しかしこれからの日本にとってインバウンド消費は（一部の鎖国主義的愛国者を除けば）必須の経済要因であることは疑いを入れません。外貨を稼ぐことは、円安の状況下であつても基本的に望ましいことであるからです。

円安は海外展開する（ドル建てで商売をしている）日本の輸出産業にとつては強い追い風になっています。トヨタ自動車は2024年3月期に売上高45兆円、純利益4・9兆円という「空前の好決算」（「朝日新聞」の表現です）を記録しました。トヨタの好調は円安のせいばかりとは言えませんが、大きな要因と言えます（「インバウン井」と同様に値上げがしやすいという点もポイントだと思います）。トヨタのみならず円安による日本のグローバル企業的好調は歴然としており、にもかかわらず国内消費や好感になかなか結びつかない、もっと端的に言えば私たちのような下々の者に「好調」が実感できないという問題も、しばしば報道されている通りです。いずれにしても輸出を軸にしている業者には「歴史的円安」は千載一遇のチャンスです。もっとも、周知のように2025年1月に誕生した第二次トランプ政権のいわゆる「関税政策」によって、日本のみならず世界各国の輸出産業は一挙に先行き不透明に陥ってしまったのですが。

## 「輸出商品」としての「日本の文化」

さて、慣れない分野の前提の確認はこれくらいにしましょう。日本が海外に売り出せる（かもしれない）モノは自動車などの工業製品、あるいは先端技術だけではありません。「ニッポンの文化」はいかにして「輸出商品」たりうるか、それが本書のテーマです。

なぜ、このテーマなのか？

先ほど、私は「経済は素人」だと述べました。これはまぎれもない事実ですが、しかし私は「文化」にかんしては、いわば玄人です。芸術文化、カルチャー／サブカルチャーの複数の領域で、気づけば37年も（私のライターデビューは1988年）いろいろと仕事をしてきました。主な活動分野は、音楽、映画、小説（文学）、舞台芸術ですが、現代思想やアートにかんする著作もあります。私はそれなりの長きにわたって横断的／総体的に「ニッポンの文化」をウォッチしてきました。とはいえ、そんな私が、なぜこうして「輸出商品としての日本文化」論を始めようとしているのかについては、少し説明がいるように思います。

私は2000年代Ⅱゼロ年代の終わりから2010年代Ⅱテン年代の半ば過ぎにかけて3冊の新書を上梓（じょうし）しました。刊行順に挙げると、『ニッポンの思想』（2009年）、『ニッポンの音

『楽』（2014年）、『ニッポンの文学』（2016年）で、いずれも講談社現代新書からの刊行でした（その後に『増補・決定版 ニッポンの音楽』が2022年に扶桑社から、『ニッポンの思想 増補新版』が2023年に筑摩書房から、それぞれ内容を更新して文庫化されています）。「（現代）思想」「音楽」「文学」とジャンルはばらばらですが、『ニッポンの思想』と『ニッポンの文学』は1980年代以降、『ニッポンの音楽』は1970年代以降の、執筆時点の現在までの歴史を扱っていて、つまり3冊は時代が並行しています。著者としては、そこに面白みを感じてくれたわけですが、もうひとつ、この3つの「歴史書」には重要な共通点がありました。それはいずれも「輸入文化」についての本だったということです。

『ニッポンの思想』は80年代、ヨーロッパ（主にフランス）のポスト構造主義哲学を日本に紹介した若きアカデミシャンたちがメディアに持て囃<sup>はや</sup>されてスター化した、いわゆる「ニューアカデミズム」と呼ばれた流行現象から語り起こされてきました。『ニッポンの音楽』は1960年代末に登場したはっぴいえんどというバンドが惹<sup>ひ</sup>き起こした「日本語ロック論争」（アメリカで生まれて英語で歌われているロックを日本語でやれるのか、といういまから思うとナンセンスとしか言いようのない論争）から話が始まりました。『ニッポンの文学』は1979年、村上春樹の出現がスタートですが、春樹がアメリカ文学からの圧倒的な影響下で小説を書き出したこと

は有名です。つまり3冊とも「海の向こうで生まれた文化を日本にどうやって移植するか」という問いが（必ずしも明示的ではない部分も含めて）主題だったのです。

詳しくは三著を読んでもらえたらと思いますが、輸入文化としての「ニッポンの文化」は、80年代という戦後最高の好景気の時代を経て、すでにバブル経済が崩壊していた90年代の前半にピークを迎えたと私は考えています。そしてその後は「輸入」よりも（間接的・無意識的な「輸入文化」も含めた）「自国文化」の時代、内向きのドメスティックなカルチャーが主流の時代に「ガラパゴス」などと呼ばれもするような状況に入っていく。もちろん文化だけの話ではありません。90年代後半から、ニッポンは緩やかな「鎖国」に向かっていった、という言い方もできるかもしれませんが（そんなことはない！）とか「それで何が悪い！」などと怒る人もいるかもしれません。そして現在は何？ それをいま真つ向から問うのはやめておきましょう。

もちろんこれはあえてかなり単純化した書き方をしています。実際には、かつての日本文化は「輸入文化」というより「翻訳文化」あるいは「ポジティブな意味を含む」誤訳文化だったと思いますし、いわゆる「逆輸入」という現象も本論の重要なキーワードです。

しかしまず入口としては、輸入文化の時代が終わってかなり経<sup>た</sup>ったいま、輸出文化としての日本のカルチャーの可能性を考えてみたいのです。過去数十年の「輸入文化」の蓄積のうえに

現在の「ニッポンの文化」があるとして、それらがいまや自閉的（鎖国的？）な鎧よろいを身にまとっているように見えたとしても、そうなるに至った歴史性やそうなるしかなかったメカニズムもすべて踏まえて、あらためて海の向こうに出てゆくことはできないか？ それは絶対に不可能なのだろうか？

そんなことはないし、そんなことはあるまい、と私は考えています。だから本書は基本的に前向きな話になります。大きな商いのことはわかりませんが、私は自分がそれなりによく知っているつもりのニッポンのカルチャーにかんして、海外進出の未来を占ってみたい。「歴史的円安」が進行するいまこそ、それを本気で考え始めるのにふさわしい時期だと思っています。